商学論集　第58巻第4号　　1990年3月

【論文】

不換通貨ドルと世界貨幣 (1)

―不換通貨ドルの国際通貨としての流通をめぐる問題によせて―

下平尾　　勲

目　次

Ⅰ　世界貨幣の一般的規定
　1　問題の所在
　2　世界貨幣の本質について
　3　世界貨幣の発生の根拠について
　4　世界貨幣と貨幣の概念について……以上本号
Ⅱ　世界貨幣の特殊的規定

ま　え　が　き

金1オンス＝35ドルという固定レートによる金・ドル交換は，アメリカの通貨当局と他国の通貨当局とのあいだでのみ行われるという種々の制約があったとはいえ，戦後の国際通貨制度の基軸を形成し，ドルにゆるぎない「信認」を与えてきた。米ドルは金1オンス＝35ドルという確定金量と交換されうるのだということが，ドルが国際通貨として流通する重要な条件をなしたからである。アメリカは自国通貨でもって，外国から，いつでも，自由に，いくらでも，商品を買うことができ，その支払や援助にドルを用いることができたのも，金・ドル交換という条件を前提としていたからであった。このような背景のもとで，各国は，ドルでもって，米国以外の国との取引や決済にドルを用い，投資に米ドルを使用してきたし，さらに一定のレートを設定して，自国通貨を米ドルとリンクさせ，ドルを中心とする国際通貨体制の維持に協力してきた。

ところで，1971年8月，いわゆるニクソン声明によって，金・ドル交換が停止された。同年12月スミソニアン博物館での合意により，一時的には固定相場制の時代もあったが，主要国通貨は変動相場制に移行した。金・ドル交換は停止され，固定的な為替相場の時代は終ったが，その後20年近くの歳月が過ぎようとしている。しかし依然として米ドルが，金との交換を停止しているにもかかわらず，長期にわたって，いわゆる国際通貨として用いられているという現実は，貨幣論研究に新たな課題を提起することとなった。すなわち，「本来国際通貨として機能しえないものを機能させるのだから，そこには矛盾がある」，「それはみせかけにすぎない」，「他に流通しうる社会的に妥当な国際通貨がなく，やむをえず一国通貨を国際通貨として用いている」，「暗黙の承認」＝「一般的な国際協力の意志」といった説明がなされているが，これらの個々具体的な説明にもかかわらず，不換通貨ドルが国際通貨として流通しうるのは，いかなる根拠によって客観的に妥当なものとして現われるのであろうか。いいかえると，金・ドル交換が停止された一国通貨が国際通貨と

して流通するのは，本来無理があり，一時的，特殊的，代理的なものであるという偶然的な事柄ないしは外的条件によって説明されたが，長期にわたって，去年のように今年も，今年のように来年もというように，ドルが国際通貨として用いられうる状態が継続するならば，人々が思惟し，表現する外的事柄からは独立に，客観的に妥当する法則の存在が前提されなければならなくなった。「みせかけ」，「やむを得ず」，「他に通貨はない」，「信認」という表現にもかかわらず，20年近く不換通貨ドルが流通した根拠を把握し，それによってこれらの現象の意味が問われる必要が生じた。そのために，この現象の前提におかれている世界貨幣とは何かがまず問題となるのであった。

I　世界貨幣の一般的規定

1　問題の所在

貨幣論に関する教科書の多くにおいては，世界貨幣は金でなくてはならぬと論じられている。世界市場においては，価格の度量基準や鋳貨や補助貨幣や価値表章という一国通貨の性格を脱ぎすてて，最も適合的な一般的等価物として登場するのは地金形態であるという。この説明の論拠として，次の事柄が指摘される。①国際取引においては，一方的な販売，または一方的購買が行われ，国内取引のように販売と購買が相互に依存し，時間的な継起において発生し，消滅していくという商品流通を形成しないから，価値表章は国際通貨を代位できないこと。②世界貨幣においては，貿易差額の支払手段として，絶対的，社会的な現物の金が登場すること。③商品取引の連関性に依拠し，商品取引における債権・債務の連鎖が形成されることはなく，商業手形が転々として流通して貨幣機能を果たすことはない。だから，世界貨幣として登場するのは，生身の金，もしくは金との交換の可能な為替手形・一国通貨でなくてはならず，金との交換を停止した為替手形や一国通貨は国際通貨として流通することはできないことになる。

ところで現実には，金との交換を停止したドルが，20年近くにわたって，久しくゆるぎない地位を占めて流通している。この事実は，仮象・矛盾として把握されるのではなく，客観的妥当なものと認めるとすれば，根本的な理論の再検討からはじめるのが妥当であろう。まず，ずっと以前から「世界貨幣は金だ」という立場にたち，一貫して研究成果を発表しておられるのは，小野朝男氏[1)]であるから，氏の提起されている問題及びその基礎におかれている貨幣理論を手かがりに研究をすすめたい。

氏は次のようにいわれる。

「各国が相対的に独立している国際間にあって，通貨として機能しうるのは，……交換価値の独立の定在である世界貨幣としての金またはそれに兌換可能な外国為替，つまり金為替のみである。戦後のＩＭＦ体制下にあってドルが金に代わる国際通貨として機能したのも，このようなものとしてである」。「しかるに，このドルが金兌換を停止し，金為替であることをやめたのである。だから，ドルが金に代わる国際通貨として機能しえないのは，当然のことである。世界貨幣

1）小野朝男『国際通貨制度』ダイヤモンド社，1963年，『国際通貨体制』ダイヤモンド社，1980年。

としての金が，国際通貨として機能する以外にはない。……だが，これは金為替を利用する場合にくらべて，流通費がかかり，けっして好ましいことではない。そればかりか，金の偏在によって，国際間の交流が妨げられる……。ここにおいて，この欠点を補うために，ドルが不換化したことによって，金為替であることをやめたドル為替を，従来通り国際通貨として機能さすことが企図された」[2)]。「しかし，これは，本来機能しえないはずのものを機能さすことを意味する。したがって，そこには無理があり，矛盾がある」[3)]。「本来国際通貨として機能しえない不換通貨ドルの為替が国際通貨として機能させられても，それはみせかけにすぎない，ということになる」[4)]。

小野朝男氏の主張にたいして，少なからぬ人たちの批判がある。代表的な論者としては，久留間健氏はこういわれる。「一方では不換一国通貨は国際通貨としては機能しえないという理論的前提から出発され，また他方では，現実には不換一国通貨であるドルが国際通貨として機能しているという認識から出発されている。この第1の前提と第2の前提とは絶対に相容れない。……問題はいわば理論的に解決不可能な形で設定されている。……これは論理の矛盾ではなく現実の矛盾だとして答えられている。こうした問題の立て方そのものに問題はないだろうか」[5)]。

同様に平勝廣氏も次のようにいわれる。「一般命題から出発されて，現状の中に矛盾の存在を指摘されるのみではいま一つ充分とは思えない。不換通貨の時代における貨幣流通と国際決済メカニズムをふまえ，そのうえで問題の推移，現象形態をとらえるのでなければ，現状分析としても，将来の展望を得る上でも不十分なのではなかろうか」[6)]。

しかし，小野朝男氏の提起した問題は，理論的前提と現実の認識とのあいだの矛盾，一般的命題から出発して現実の現象を説明する過程にあるばかりではなく，いっそう根本的には，一般的命題それ自体の理論のあり方にあると考えられる[7)]。まず「世界貨幣は金である」という一般題のもつ意義が解明されるならば，「仮象」と「現実」とのあいだの論理的・現実的矛盾の性格および一般的理論でもって具体的現実的な事柄を説明する方法論上の問題も解決されると思われる。

2）小野朝男「世界市場と金為替」松井安信・三木毅編著『信用と外国為替』ミネルヴァ書房，1978年，92～93ページ。

3）同上書，93ページ。

4）同上書，95ページ。

5）久留間健「不換ドルの国際通貨としての流通根拠」長州一二編著『現代資本主義と多元社会』日本評論社，1979年，195ページ。

6）平廣勝「不換の国際通貨ドルの流通根拠」高木暢哉先生古稀記念論文集『現代の貨幣・金融』ミネルヴァ書房，1980年，125ページ。なお136ページ，及び「国際通貨」小野朝男・西村閑也編『国際金融論入門』有斐閣（第3版）1989年，117～118ページを参照。

7）不換国際通貨ドルの根拠をめぐるサーベイとして：建部正義「変動相場制」高須賀義博編『独占資本主義論の展望』東洋経済新報社，1978年，180～183ページ，松井安信「不換銀行券論」川合一郎編『現代信用論』（上），有斐閣，1978年，118ページ以下，村岡俊三「国際通貨ドルの本質規定をめぐる問題」『信用論研究入門』有斐閣，1981年，205～9ページを参照。

2　世界貨幣の本質について

最終的な決済手段としては，国際通貨は金でなければならないから，あるいは「ドルが金に代わって国際通貨として機能するのは，ドルが金為替であるから」，金との交換性をもたない一国通貨たるドルが国際的な舞台で通貨として機能を営むとすれば，それは国際通貨体制は変質したことになる。この考え方の根底には，「世界貨幣は金である」，あるいは「金との交換が約束された通貨でなければならない」といわれる場合には，「世界貨幣は金である」という命題は，世界貨幣の本質は金であるという理解が存在している。だから，金または金為替という本質的なもの以外のもの（非本質的なもの）が，現実に流通すれば，その現象は仮象だということになる。だから，「世界貨幣は金である」という命題は世界貨幣の本質について述べたものであるかどうかがまず問題となる。その命題は世界貨幣の一般的形態ではなく本質に関する命題だという自説の正しさの典拠として，氏が引用される『資本論』（現行版）第1巻第3章「貨幣または商品流通」の(C)世界貨幣の冒頭においては，実は次のような一般的規定が与えられている。

「(1)貨幣は国内的流通部面から歩みでると共に，価格の度量基準，鋳貨・補助鋳貨・および価値章標という，そこで生長する地方的諸形態aufschiessenden Lokalformをふたたび脱ぎすてて，貴金属の元の地金形態Barrenformに逆戻りする。(2)世界商業においては，諸商品はそれらの価値を普遍的に展開する。だから，そこではまた，諸商品の自立的・・・価値姿態が世界貨幣として諸商品に対応する。(3)世界市場で初めて，貨幣は，十分なひろがりにおいて，それの自然的形態が同時に人間的労働それ自体の直接的に社会的な実現形態unmittelbar gesellschaftliche Verwirklichungsform der menschlichen Arbeit in abstractoである商品として，機能する。(4)貨幣の存在様式Daseinsweiseが貨幣の概念に適応したものとなる」[8]（傍点および(1)(2)(3)は引用者が挿入したもの）。

この『資本論』の章句の中で注目すべきことは，(1)においては，世界貨幣の一般的な形態がとかれていること，つまり，世界的に価値形態として妥当する商品の地位を金銀という貴金属が占め，しかも地金形態に逆もどりするということである。(2)にあっては，諸商品の価値の普遍的・世界的な展開の形態規定性において諸商品に対して世界貨幣が意義づけられていることであり，(3)においては，世界貨幣の地位にたつ商品の自然形態が人間的労働それ自体の直接に社会的な実現形態として把握されていること，すなわち，世界的なひろがりにおける価値関係を背景として，私的労働の生産物でありながら社会的労働として妥当するところの，人間的労働の社会的形態として世界貨幣が把握されていることである。(4)にあっては，貨幣の存在様式が貨幣概念の真に客観的に妥当なものとしてあらわれ，世界貨幣においてはじめて，貨幣の概念が完全なものとなって貨幣の存在様式が貨幣の概念に照応することである。

以上4つの章句は短いものであるが，この中に，(1)世界貨幣の一般的形態規定，(2)世界貨幣の本質的規定，(3)世界貨幣の発生根拠の規定，(4)世界貨幣の性格規定が包含されている。ここでは，世

8）*Das Kapital*, M. E. L. Institut, Bd, 1, S. 148. 邦訳については主に長谷部文雄訳青木書店版によった。しかし必ずしも訳文通りではない。『資本論』初版においても同様の論述が行われている。SS. 103～4。

界貨幣の本質をどのように考えるか，それの形態を，そしてその形態の発展をいかに把握するかが問題となっているから，少し順序を変えながら考察したい。

まず世界貨幣の本質からはじめよう。小野氏の主張はこうである。世界貨幣の一般的形態が金ではなく，世界貨幣の本質が金である。「金は生まれながらにして貨幣ではないが，貨幣は生まれながらにして金である。このことは国内市場のみならず，世界市場においても，妥当することである。金はこのようなものとして国内市場で貨幣であるのみならず，世界市場でも貨幣である」[9)]。「……アメリカのドル為替は，……政府およびその代行機関相互の間の調整，管理を通じての金兌換の確保される限り，国際通貨とし[て]流通する」[10)]。ドルが金に代わって国際通貨として機能するのは，ドルが金為替であるからである。ドルが対内的には金との兌換を停止していても，対外的には金兌換を許しているからである」[11)]。

世界貨幣の本質は金である。金との交換を停止したアメリカのドルは世界貨幣ではないという主張は，「理論と現実との矛盾」ではすまされない重要な問題を含んでいる。それは世界貨幣の本質をいかに把握するかという根本問題にかかわるからである。

マルクスの世界貨幣の本質規定は，諸商品価値の普遍的な展開の産物として金：銀に与えた特殊・歴史的な規定であった。大規模に発展した世界商業は，生産物の商業化の中で，商品価値の普遍的なもののみを表現する特殊商品を世界貨幣とした。その特殊商品として最も一般的なものとして，商品価値を尺度し，交換や支払の対象として世界市場において最も妥当なものとして金銀という形態を選び出した。この金銀という特殊な商品は他のすべての商品価値の一般的等価形態となった。

日本で生産された自動車，カナダの木材，オーストラリアの牛肉，インドの綿花，ブラジルの鉄鉱石，キューバの砂糖が外国に販売され，その支払のために貨幣が必要であり，また海外で事業を営むために貨幣が必要である。外国商品の購買，貿易差額の支払，海外投資という日常的行為の中に貨幣が登場してくるが，その貨幣の登場を動かしているものこそ商品価値である。世界商業に関係した世界貨幣ではなく世界商業そのものにおける世界貨幣が問題である。

世界市場では，諸商品は，価値として世界共通に妥当しようとするから，世界的規模で意味をもつ一般的等価形態が成立しなければならない。すなわち，世界の商品所有者達は，彼らの諸商品を一般的な等価としての金銀に関連させることによってのみ，諸商品価値として，世界商品として相互に連関させることができる。世界のすべての諸商品が価値として金銀に関係するから，世界的に価値としてのみ意義をもつ商品が分離され，金銀という特定の商品が諸商品と並んで価値姿態，商品価値の実現されるべき形態として自主化して世界貨幣となる。多数の諸商品の中から特殊な金銀という商品を世界貨幣として妥当させたのはなぜかといえば，世界のすべての商品が価値として金銀に関係し，自分たちの諸商品価値を全面的に表示するものとして排除したからである。その結果として金銀という自然形態が世界市場において直接にいかなる商品とも交換可能であるという形態規定性を受けとったのであった。すべての諸商品に共通な価値としてのみ，金銀に関係したからで

9）小野朝男「国際決済」小野朝男・西村閑也編『国際金融論入門』（第3版）有斐閣，1989年，26ページ。

10）小野朝男『国際通貨制度』ダイヤモンド社，1963年，25ページ。

11）小野朝男「世界市場と金為替」前掲書，92ページ。

あった。価値として比較可能であり，価値として交換可能であるから，価値としてのみ妥当する社会的規定性を金銀が受けとるならば，直接的に交換可能なという独自の社会的規定において金銀は登場することになる。こうして金銀は世界貨幣となったのである。

『経済学批判』では，次のように述べられている。

「(1)すべての生産物が金銀とひきかえに譲渡される割合におうじて，金銀はすべての商品の転化された姿となり，したがって全面的に譲渡可能な商品となる。……金銀は，その交換部面をなす特殊な等価物の系列が発展する程度におうじて一般的等価物となる。(2)世界流通では，諸商品がそれら自身の交換価値を普遍的に展開するから，金銀に転化された交換価値の姿が世界貨幣としてあらわれるのである。(3)それで商品所有者である諸国民は，彼らのあらゆる方面にわたる産業と全般的な交易とによって金を十全な貨幣につくりかえるのである。……だから世界貨幣としての金銀は，一般的商品流通の産物である[12)]……」（(1)(2)(3)及び傍点は引用者）。

(1)すべての諸商品が金銀とひきかえに譲渡されるという，ひとつの関係の中では，相互に関係しあう二つの側面として，一方に諸商品の価値を表現し，生産物の中に含まれている価値の現実形態をえようとし，他方ではそれでもって価値が表現される対象は商品価値の転化形態，金銀という物においてあらわれるところの価値性格をもつ。商品はたんに目でみ，手でふれることのできる自然形態のままで，交換過程の中に入るのではない。このような感性的に多様な自然形態のほかに，商品所有者の表象において存在する価格をもって交換過程に入る。労働生産物は商品として相互に連関させる必要が増加するのにおうじて，一つの特定商品が価値物としてのみ妥当することとなる。

(2)生産物が世界的な交換を目的として生産されるようになると，貨幣もまた世界貨幣としての地位を高める。インドやエジプトから大量の綿花が購入され，あるいはサウジアラビアから多くの石油が購買され，またインドネシアから木材やゴムやニッケルが輸入されるならば，その購買や支払のために多額の貨幣が必要となる。世界のめずらしい商品が市場に集められ，販売されるから，それを購買するために，世界的に流通する貨幣が必要となる。こうして世界市場が発達してくれば，世界貨幣が登場する。この地位を占めたのは世界貨幣の概念にふさわしい自然的性質を有している貴金属形態であった。だから，世界貨幣としての貴金属は，独立して各国に存在している諸商品に社会的な，しかも全世界に通用しうる形態を与えるのではなく，諸商品に内在している価値性格の世界的なひろがりにおける外在化が，特定の商品に世界貨幣としての性格を与えるのである。世界市場における取引が活発化し，地域的にも拡大するにつれて諸商品の価値関係は世界的にも妥当性をもつ一般的等価物をつくり出すのであって，このような世界的に商品生産社会に固有の社会関係があらかじめ存在しているからこそ，市場が地域から世界に拡大すれば，そして商品取引が国際取引上重要性を増すのに対応して，世界的に最も妥当な，一般的な等価形態として金銀が登場してきたのである。それは同時に金銀に代って新たな貨幣諸形態を登場させることにもなる。したがって，世界市場における商品価値の普遍的な展開が世界貨幣の発生の拠拠であって，貴金属はその一般的な形態として登場したにすぎない。

---

12) *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Karl Marx − Engels *Werke*. Dietz Verlag Berlin, Bd. 13, S. 127, 邦訳『マルクス・エンゲルス全集』13. 大月書店，129ページ。

(3)世界的な商品流通の産物として世界貨幣が登場し，世界貨幣の登場によって世界市場が拡大した。国と国との間には，宗教的，政治的，国民的，言語的に相違があり，障壁があるが，商品価格という共通の商品語が登場することによって，その障壁が取り除かれる。交通が発達し，国と国とのあいだの障壁をこえて商品の流通，交易が拡大すると，宗教的，国民的，政治的偏見を超越して商品語で語られる。「アメリカのイーグル貨の形態でイギリスに上陸したその同じ金が，ソヴリン金貨となり，3日後にはパリでナポレオン金貨として流通し，数週間後にはドウカート金貨としてヴェネチアにまた現れても，やはりいつも同じ価格を保持しているように，商品所有者にとっては，国民性は〈ギニー金貨の極印にすぎない〉ことが明らかとなる。商品所有者にとって全世界が帰趨する崇高な理念は，一つの市場――世界市場という理念である」[13]。多用なる産業の発達，交通の発展と交易の拡大によって，「世界市場という崇高な理念」[14]が形成されるにつれて，金は世界貨幣となる。

3　世界貨幣の発生の根拠について

世界のすべての商品が国境をこえて，いかなる国で生産されようとも，交換されうるためには，一定の基準をもたねばならない。同等性なしには，比較され，交換されることはない。通常人々の眼前にあらわれるのは，価格である。インドで生産される綿花，サウジアラビアの石油，カナダの木材，イギリスの綿織物，アメリカの自動車等，これらの商品はいずれも価格をもって外国に輸出される。もちろんサウジアラビアの石油だけでも，種々の現実的・具体的な面では多様な価格をもつ。国内の市場価格に関係するか，国際価格か，卸売価格か，小売価格か，市場との関係において，同一種類の商品についても種々の価格が成立しうる。

いかなる期間，いかなる市場，いかなる取引段階に関係させるかによって，同一種類の商品価格は異っていても，このような個々具体的な価格のほかに，人々は社会的にみて客観的に妥当な価格

---

13) *A. a. O.*, S. 128, 130ページ。

14) 「金が鋳貨と区別された貨幣になるのは，……商品の世界で一般的等価物として機能するために国内流通の制限を突破することによるのである。こうして金は世界貨幣となる。」（*Kritik.*, S. 125. 邦訳126ページ，傍点は原文）。世界市場の中で，「金は世界貨幣となる」という規定を，小野氏は「世界貨幣は金だ」と解釈して金本位制の論理を構築される。「……K．マルクスの言葉を引用するまでもなく，金は〈商品の世界で一般的等価物として機能するために国内流通の制限を突破する。〉そしてこれによって〈金は世界貨幣となる〉。だから，これに対応して，世界市場において，世界貨幣の制度としての金本位制が成立することは，明らかである。それは，国内的流通部面において，金が貨幣となるのに対応して金本位制が成立するのと，まったく同様である。」（『国際通貨体制』ダイヤモンド社，1976年，128ページ）。

金は「商品世界で一般的等価物として機能するために国内流通の制限を突破する」のではない。金が鋳貨と区別された貨幣となるのは，「……国内流通の制限を突破する」ことによるということである。金自らが国内流通の制限を突破し，金本位制へ発展するのではない。金は世界貨幣であり，世界貨幣は金だから，金が貨幣となることによって金本位制が成立するとされる。金本位制が成立するのは，商取引の急激な拡大，産業循環の円滑性にもとづいて銀行手形や為替手形を金と結合することによって登場したからであって，金＝世界貨幣自体の自己運動によってつくり出されたのではない。金＝世界貨幣の規定の自己発展の途上に金本位制という論理は構築できないように思われる。

というものを認める。個々具体的な取引において登場する価格は，個々の具体的な交換のためにあらわれ，取引の終結とともに消滅する。その価格は需給関係を通じてまちまちである。ところが社会的に客観的にみて妥当とされる価格は，具体的な価格の変動からある程度独立して，一定の期間にわたって存続している。たとえばサウジアラビアの石油（アラビアンライト）は，1バーレル当たり，ある時には18ドルであったり，19ドルであったり，21ドルになるかも知れない。人々の表象としては20ドル前後というように前提し，年間計画をたてる。もし1バーレル＝30ドルともなれば，オイルショックの再現となり，世界経済は大混乱をきたすことになる。

1バーレル19ドルにするか，20ドルにするかは，輸出入業者，取引業者の合意によって成立するが，しかし，社会的に妥当な価格としての20ドル前後という基準というものは存在し，その基準が交換しようとする当事者の価格決定に影響を与える。買手は緊急やむをえない事情がない場合は別として，通常はより安く買いたいと考えるし，売手はより高く販売したいと考える。極度に高い場合には，買手は買い控えるであろうし，反対の場合には，売手は販売をさしひかえる。人々は現実の取引に先立って，その時その市場において社会的にみて客観的に妥当な価格の表象をもっており，それを金量で表示するか，ポンドで表現するか，ドルでいいあらわすか，いずれにせよ，この妥当な価格が現実の交換の重要な基準である。現実の価格はこの基準とそれほど大きくない点で決定される。

現実には種々雑多な取引が無限に，複雑に連関し，たえまなく行われ，相前後し，並列して取引が行われている。その取引の中での差異は大量的に観察すれば消滅し，傾向として一定の状態が，すなわち，社会的にみて基準となる価格が確立されてくる。基準としての価格自体も変化していくが，個々具体的な取引のように取引の完了とともに消滅するのではなく，それらの変化の中にあっても一定期間存続する。個々の具体的な価格のあり様については，当事者間において意見の不一致や不確実性の入りこむ余地を残している。しかしそれにもかかわらず，一定の価格を交換当各者の判断，意欲，願望から独立して，客観的なものとして前提するのはなぜか。商品は目でみ，手でふれて多様であり，品質，機能，組合わせ等も異っていても，質的に同一で，量的に比較可能な価格の単位に環元しうるのはなぜか，しかも，その価格を交換者の主観的判断から独立した客観的なものとみるのはなぜか。その理由は人々の判断作用とは独立に，商品それ自体のうちに客観的に存在している価値を前提するからである。価格とは貨幣で表現された商品価値であるが，価値を表現するものとして一定の価格が客観的に妥当性[15]をもつ。貨幣は表現の手段であって，種々の手段をとりうるが，商品価値からみて，商品価格が妥当であるかどうかという現実の価格の表象をもって交換に入っていく。商品の交換に入るまえに商品価値は価格で表示されている。商品価格は商品交換の前提であって，その結果ではない。

15）社会的にみて客観的に妥当な価格というのは，個々具体的に取引される商品価格を規定する基準，標準的な価格というだけでなく，この2つの価格差こそは，人々の労働評価として，労働力を配分し，新技術の採用を促し，資本の移動＝配分を規定するものである。生産及び交換を現実的につくりかえる概念でもある。個々具体的な価格とは独立して存在している社会的にして客観的な価格は，さまざまな商品価格の現象を支配する実体概念として意味をもつだけでなく，労働技術，資本の配分を支配し，新たな関係を創造する主体概念でもある。

それでは，日常生活において，人々の具体的現実的な価格を規定する社会的にみて客観的に妥当な価格を規定する商品価値を規定するものはなにか。商品価値の正当な内在的な交換力を規定するのは，抽象的人間的労働にほかならない。インドで生産される綿花とサウジアラビアの石油とカナダの木材等々の間では質的に大きな相違がある。しかし，これらの質的に異なった生産物には，いずれも人間の労働力が支出されている。人間の労働生産物という見地のもとで比較されうる。綿花と石油，木材と自動車とが取引される場合には，国際価格として比較されるのだが，その基礎には，それぞれの商品の生産に支出される人間的労働力が存在している。だから労働生産物を相互に価値として特殊な商品＝金銀に連関することは，金銀という等価物に含まれている特殊・具体的労働を抽象的・人間的労働の実現形態として，どの商品にも共通な，抽象的人間労働という同等性の現象形態とみなす。

だが現実には，「社会的に妥当な，そして客観的な思想諸形態」はてん倒してあらわれてくる。すなわち，「人々が彼等の労働生産物を諸価格として相互に連関させるのは，これらの物象が彼らにとって同等な種類の，人間的な・労働の単なる物象的外皮として意義をもつからではない。その逆である。彼らは，彼らの相異なる種類の諸生産物を交換において諸価値として相互に等置することにより，彼らの相異なる諸労働を人間的労働として等置する」[16]。「価値の大きさの規定をもたらしたのは，諸商品価格の分析にほかならなかったし，諸商品の価値性格の確定をもたらしたのは，諸商品の共同的な貨幣表現にほかならなかった。だが，商品世界のこのできあがった形態――貨幣形態こそは，まさに私的諸労働の社会的性格を，したがってまた，私的労働者たちの社会的諸関係を明示する代りに物象的におおいかくすものである。わたしが，上衣・くつなどは，抽象的・人間的労働の一般的体化として，リンネルに連関するというならば，この言葉の変なことが眼につく。だが，上衣・くつなどの生産者たちがこれらの諸商品を一般的等価として，リンネルに――または金および銀であっても事態を何ら変化させない――連関させる場合には，彼らにとっては，社会的総労働に対す彼らの私的諸労働の連関がちょうどこの変な形態で現象するのである」[17]。

すべての商品が，その価値を普遍的に展開し，一つの特殊な商品を一般的な等価物として排除して，世界貨幣として規定を与えるのであるが，この関係の中で根本的に人と人との社会的関係が実現されているのである。すなわち一般的等価にたつ商品は，他のすべての商品とおなじく，私的労働の産物であるにもかかわらず，直接に社会的労働という形態を受けとるということである。それはすべての商品と本質的に同等であり，それによってのみ比較可能な抽象的人間労働の実現形態として妥当しているからにほかならない。世界市場において，商品を生産する各国の私的生産者たちの労働が商品価値という物的性格を通じ社会的労働への転換をはからねばならないのだから，一般的等価物たるべき商品は，その自然形態が価値物としてのみ意義をもち，その商品を生産する具体的有用的労働が抽象的人間労働の実現形態としてのみ登場する。抽象的人間労働の外化形態の成立の必要性が世界市場に適応した貨幣を形成し，それとの関係で相異なる諸国で生産される多様な諸商品に共通な抽象的人間労働の社会性が確立されるのである。

---

16) *Des Kapital*, Bd. 1, S. 79.

17) *A. a. O.*, S, 81.

『資本論』における章句――「世界市場ではじめて，貨幣は，十分なひろがりにおいてそれの自然形態が同時に人間的労働それ自体の直接的に社会的実現形態たる商品として機能する」は上のような意味に用いられているのである。『経済学批判』では，「現実労働の物質代謝が地球上にゆきわたるにつれて，金銀は一般的労働時間の物質化したものとして実現される」[18]とのべているが，交通の発達，生産される商品量の増加，交易量の増加，原料が世界の生産者へ，生産物の世界市場への輸送量とその速度の発達，種々の生産部門の集中と世界市場の拡大等の中で，金銀は具体的有用労働において抽象的人間労働の現象形態，私的労働の生産物でありながら社会的労働の形態を受けとる。フランス語版『資本論』においては，世界貨幣の機能は次のように要約される。「貨幣は世界市場で，またこの市場でだけ，自然形態が同時に人間的労働一般の社会的化身であるような商品として，言葉のあらゆる意味において機能する」[19]。全世界のすべての諸商品は，人間的労働としては一般的であるから，金銀という「一般的なものと関係することなしには一般的関係を表現することはできない」[20]。

すべての諸商品に共通な・統一体としての労働＝抽象的人間労働とその労働において社会的性格を明らかにし，この抽象的人間労働の物的な社会的実現形態（社会的・一般的・妥当な関係）として貨幣を把握すること，これがマルクス貨幣論の基本精神であるが，この基本精神は世界貨幣論においても論理的に首尾一貫しているだけでなく，まさにこの基礎のうえでみ，世界貨幣論が具体化され，展開され，論述されていることに注意がはらわねばならない。

4　世界貨幣と貨幣の概念について

世界市場において，生産物の多くが商品として取引され，取引国の範囲が拡大され，交通＝運輸手段の発展とともに交易の量と速度が促進されるにつれ，世界的に価値姿態＝一般的等価物として妥当する商品も発展せざるをえない。このように発展してきたのが金銀であり，金銀が世界貨幣の地位につくが，世界貨幣こそ真に貨幣の概念に適合したものである。マルクスは貨幣の概念と世界貨幣との関係について，つぎのように述べている。

「貨幣の存在様式が貨幣の概念に適合したものとなる。Seine Daseinsweise wird seinem Begriff adäquat」[21]

「商品の価値姿態が普遍的貨幣――ジェイムス・スチュアートが呼ぶように世界貨幣であり，彼の後でアダム・スミスが述べたように，大商業共和国の貨幣である――の姿態のもとで，商品に向かいあうのも，諸国間の商業においてである。……世界市場では，貨幣の存在様式ではその概念に適合したものとなる。」[22]

「金と銀は貨幣としては，その概念上一般的商品であるが，それらは世界貨幣としては，その

18) *Zur Kritik*., S 127.

19) 江夏・上杉訳フランス語版『資本論』上巻，法政大学出版局，1979年．124ページ。

20) *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*. Dietz Verlag Berlin, 1953. S. 119.

21) *Das Kapital*, Bd. 1, S, 148, Das Kapital Auf, 1, S. 104.

22) フランス語版，江夏・上杉訳『資本論』，前掲書，124ページ。

概念上一般的商品であるが，それらは世界貨幣で普遍的商品というそれに適合した存在形態をうる。」[23)]

諸商品の価値の普遍的な展開は，世界貨幣において真に妥当な社会的形態を受けとったのである。商品を生産する労働の独自的性格は，価値形態を規定し，貨幣を規定するだけでなく，価値の実体が抽象的人間労働――『経済学批判』では抽象的一般的労働とよばれているが――であるという一般的社会的性格によって価値概念に最も妥当な形態として貨幣形態を根底から規定するのであるが，抽象的人間労働――マルクスは社会的実態gesellschaftlichen Substanz，価値を形成する実体wertbildende Substanz，諸価値の実体die Substanz der Werteとよんでいる――が世界的規模において意味をもつようになるならば，貨幣の概念は最も妥当な客観的な意味をもつ貨幣形態を生み出してくることとなる。社会的実体が世界共通に存在するからこそ，商業活動が世界的規模に拡大し，重要さを獲得したとき，普遍的な貨幣が成立することになる。世界の各国において生産される諸商品のうちにやどっている独自的本性が，外的に必然性をもって現実の人々の目にみえる姿をとるのは，世界商業の発達によるものであるが，その独自な形態が世界商業活動に意義のある姿を何によって得たか，といえば，それは貴金属という貨幣にほかならなかった。この貴金属という貨幣形態は貨幣の概念に適合したものとして登場するのであった。

貨幣は諸商品の価格，商品流通の関係によって，独自の形態規定――関係の中で与えられる社会的規定を受けとる。価値尺度，流通手段，蓄蔵貨幣，支払手段という形態の規定は商品運動の中で与えられるが，発展段階を示すのである。価値尺度機能を前提して流通手段が説かれ，流通手段の否定として蓄蔵貨幣が説明され，流通手段のいまもう一つの否定――諸商品の譲渡と価格の実現との時間的分離――によって支払手段が説かれるのであって，一般的な規定から特殊な規定へと段階をふんで展開されてくる。それらの規定は貨幣自体の内的矛盾の展開だと考える人もあるが，そうではなく，商品流通の発展の中で与えられる貨幣の形態規定[24)]である。世界貨幣においては，これらの発展段階の規定――価値尺度，流通手段（購買手段），蓄蔵貨幣，支払手段――を一つの契機として，つまり一つの機能として含んでいるのである。貨幣のさまざまな形態規定を自己のうちに従属的に含んだものとして世界貨幣は登場する。このようなものとして世界貨幣は貨幣の概念に適合したものといわれているのである。

すべての商品がそれの価値を普遍的に展開して，特定の一商品で価値を表現し，それと交換するから，その特殊な一商品がすべての商品の価値の転化された形態として登場する。だから世界貨幣

---

23) *Zur Kritik.*, S. 127.

24) 『経済学批判』第2章，貨幣または単純流通における「まえがき」にあたる部分で，マルクスはつぎのようにのべている。「貨幣の分析におけるおもな困難は，貨幣が商品そのものから発生するということが理解されればたちまち克服される。この前提のもとでなおまだ問題となるのは，貨幣の固有な形態規定性を純粋に把握することだけである……。」（S.49）。「以下の研究でしっかり把握しておかなければならないことは，商品の交換から直接に発生する貨幣の諸形態だけを問題にし……」（同ページ）。貨幣の機能規定とはいわずに「商品交換から直接に発生する貨幣の諸形態」，「貨幣の固有の形態規定性」とのべていることは，貨幣の諸規定を貨幣の内的矛盾の展開においてではなく，商品流通の関係規定＝反省規定として把握していることを意味している。したがって貨幣だけをきりはなし，さらに金銀だけをとりだして，それに本質的な規定を与えることはできない。このことは形態規定性の本性から明らかであろう。

の規定は貨幣一般の規定と同じく，特定の一商品それ自体の自然的属性によって規定されるのではなく，世界市場における商品価値の展開によって基礎づけられ，媒介されている。世界市場がそれに固有の貨幣を必要とする。国際的な価値尺度，商品の購買のための貨幣，貿易差額のための手段，蓄蔵貨幣等の諸機能を展開しうるのに適合した商品がえらび出される。穀物，毛皮等にとって代って，一般的等価形態の地位を金や銀が占めるようになるが，このような地位を最終的にそれらが占めるようになったのは，金や銀の自然的性質が貨幣の概念と照応したからであった。

すべての諸商品は，使用価値が異なり，感性的にも多様であるにもかかわらず，価値としては，質的に同等で量的にのみ分割されるから，このような価値を表現する材料にたつ金や銀は，そのような性質を生まれながらにもっている。もし商品の価値を穀物，毛皮，家畜でもって評価するならば，実際的にはそれらを平均的な穀物，平均的な毛皮や家畜で測らねばならないであろう。質的に一様であるということを前提にして，相互の比較が可能となるから，穀物や毛皮や家畜に比較して，質的一様性，分割や複合可能性において金銀は貨幣の価値尺度としてはるかにすぐれた性質をもつ。このような性質によって金銀は価値尺度を独占してきたのである。

購買手段としては，貨幣はわずかの体積の中に多くの価値を含むことにより，運搬，輸送の容易さ，一国から他国への迅速な移転，流通過程への投入とそこからの引上げが可能であり，直接の消費対象でないために流通しうる条件をもっている。わずかの体積中に多くの価値を含み，さらに物質的な可動性が高いことが流通手段，購買手段として優位性に立つ条件となる。

蓄蔵貨幣としては，高い価値比重，耐久性，酸化しないこと等が蓄蔵の自然的属性であり，美的属性が蓄蔵の心理的作用の原因であり，いかなる商品とも直接交換可能だということが致富の対象となっている。蓄蔵の対象物としては，わずかの体積に多くの価値を含み，耐久性，質的一様性，美的性質等の金銀のすぐれた自然的属性が蓄蔵貨幣の材料を提供している。

支払手段としては，貿易収支の決済の手段としての地金形態は世界の共通性をもつ。金銀は，鋳貨の形態から地金の形態へ，地金から奢侈品の形態へ，また逆の方向へいつでも転化しうること，いちど与えられた使用価値の形態の変形という面では他の商品よりすぐれた性質をもっている。ある一つの形態から他の形態に転化しなければならない貨幣の自然的な条件に適しており，そのためにこそ金銀を貿易差額に充用されることになる。こうして金銀は絶対的な価値存在として，支払手段となり，蓄蔵貨幣となり，また購買手段となる。このような性質[25]をもつものとして，金銀は貨幣の姿において歴史的に登場する。

金銀が穀物，毛皮や家畜にとって代って，世界貨幣として登場したのは，金銀の自然的属性が貨幣の諸規定を機能させるのにふさわしく，貨幣としての妥当性を有していたからである。こうして金銀は，世界貨幣の一般的形態となった。しかし世界市場の飛躍的な発達，交通・運輸・通信手段の急速な発展および商品流通量と流通速度の顕著の進展にともなって，貨幣の諸形態も発達し，これまで一般的な形態だと考えられていたものが条件的なもの，特殊的なものへ転化してくるのであった。

25）貴金属が貨幣の地位についたのはなぜかについて自然的属性との関連で詳細に論じられている。Vgl., Zur Kritik., SS. 128～132. Grundrisse., SS. 91～101.